



今回訪問した平潭総合実験区管理委員会の担当者によれば、平潭島のキャッチフレーズは2つあり、一つが「中華民族共同の家を作る」、そしてもう一つが「できることからやってみる（先行先試）」だという。メディアの報道では、この島を一国両制の実験区にするのではないかとか、民主を先行的に実施してみるつもりなのではないかといった予想もあったようだが、今のところはこうした政治的な意義よりも経済的な意義を強調しているようで、「(上海を中心とする)長三角と(広州を中心とする)珠三角の間にはさまれて開発が遅れてきた福建省全体を急速に経済発展させるために、福建省全体を後背地とする『福建の深せん』を作ることが目的だ」と語っていた。確かに台湾全体を香港に見立てれば、ここ平潭島は地理的には広東省の深せんに対応すると言えなくもない。

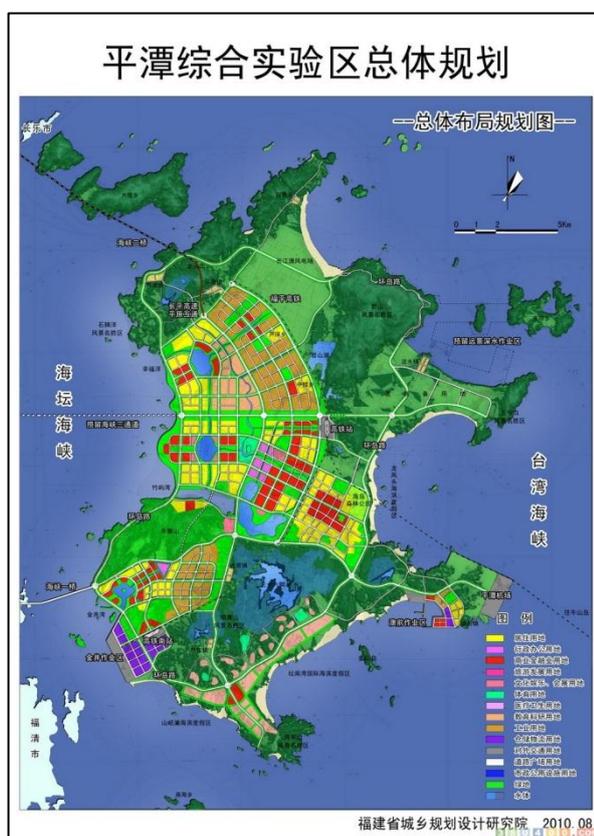
この目標を実現するために、平潭総合実験区管理委員会は台湾人を大量に雇用する計画を発表し、ナンバーツーに相当する副主任以下数十人の幹部ポストを台湾人に開放している。(ただ、今回訪問時に、既に台湾人副主任が着任しているかどうか聞いたところ、何故か「自分は招商担当なのでよく知らない」ということだった。)

## (2) モーレツなインフラ投資

目下のところ、平潭総合実験区最大の目玉は大規模なインフラ投資だろう。中国各地でモーレツなインフラ投資をさんざん目にしてきた筆者ですら、ここ平潭の投資具合は一行違う印象を受けた。何とんでも 300km<sup>2</sup> を超える島に数年間で 3 兆円を超える巨費を投入し、島を全面的に改造するというのである。

具体的な投資プロジェクトとしては、まず大陸との間に 2 本の橋（うち 1 本は道路鉄道併用橋）をかけ、更に強風時でも通行できるよう 2 本の海底トンネルを掘ることにはじまり、鉄道としては福州市から空港を経由して高速鉄道（2015 年開業予定）を引き込むとしている。この高速鉄道は、将来的に海底トンネルを通じて台湾まで延長することを想定して設計しているということだが、今のところ台湾側はこの計画に応じる気配はないとのことだった。同時に、島の中央部を大規模な市街地として開発し、現在の 2 倍に相当する 100 万人規模の都市とするほか、大規模な港湾（深水港）や空港の建設まで視野に入れているようだ。

平潭島マスタープラン →



これらは単なる絵空事ではなく、実際に 2010 年末には 150 億円をかけて全長 5km の「平潭海峡一橋」を片側一車線ながら開通させ、目下急ピッチで往復四車線化の工事を行っていた。



↑ 増設工事が進む平潭海峡一橋。奥が平潭島。

### (3) 海関特殊監管区

インフラ以外の目玉としては、今のところ、島全体が指定されたという「海関特殊監管区」のようである。制度の詳細は十分理解できなかったが、どうやら島全体を保税区を上回る特殊な区域として位置付け、海外からの原料を無税で持ち込んで加工し再輸出できるほか、国内向けにも出荷できる仕組みを講じているようだ。

台湾から平潭島までは、昨年末に台中との間を結ぶ高速フェリーが就航、今年からは台北直航路線も開通しているほか、定期貨物船も就航しており、台北新竹港から台湾企業の多い江蘇省昆山までの所要時間は、上海外高橋港経由（30 時間）より 10 時間も短い 20 時間で済むという。まだまだ定期貨物船の便数が少ないのが悩みだが、こうした物流面でのメリットを踏まえ、平潭海峡一橋の近く、将来建設されるという深水港に近い一角である金井湾工業団地に、物流関係を中心とする台湾企業や一部韓国企業が既に進出を決めているということだった。他には、台湾からの果物を輸入して加工・販売する施設等のプロジェクトも進んでいた。



↑ 埋め立てが終わった金井湾工業団地。この写真は全体のごく一部にすぎない。



↑ 一部では既に工場建設も始まりつつある。

#### (4) 土地財政モデルに依拠した爆走??

中国では重要な開発区に国家指導者が視察に訪れることが一般的だが、総合実験区管理委員会担当者によれば、既に旧常務委員 9 名のうち 5 名（呉邦国、贾慶林、李長春、李克強、賀国強）が平潭島を視察に訪れたという。ただ、福建省書記や福州市書記を勤め、昨年 11 月に総書記にのぼり詰めた習近平氏はなぜか未だ訪れていないということだった。担当者は、「あまりに本プロジェクトを熟知しているので、訪れる必要すらなかっただけだ。」と言っていたが、不思議な気もするものの、確かに福建省経験の長い習氏は、逆に地元べったりという印象を持たれるのを恐れて訪れていないだけなのかもしれない。

巨大なインフラ開発費の出所についても質問してみたが、明確な答えはなかったものの、必ずしも国家財政が多くを占めているわけではないようで、ここ平潭島では前回お伝えした深セン前海特区と異なり、農家の土地を安く収用して開発会社に高値で売却するとともに、将来の収益を担保にして巨額の借入れをして投資を行う「土地財政」モデルが健在ぶりを示しているようだった。実際、訪問時に雇ったタクシー運転手も平潭島出身だが、「自分の土地は 1 ムー（666 m<sup>2</sup>）当たりわずか 3.6 万元（40 万円強）にしかならなかった。」と強い不満を述べていた。実験区管理委員会に工場用地の売却代金を聞いても口を濁していたが、どんなに安くても 1 ムー 10 万元を下回ることはないはずで、管理委員会のもう一つの合言葉、「大干快干」（でっかくやろう、早くやろう）は、単なるスローガンを超えて、金利負担を最小限に抑えるという実務的な面からも必要不可欠なポイントなのであろう。土地バブルが全開状態である証拠に、このような僻地の離島でも新築マンション価格は 13,000 元/m<sup>2</sup>（約 20 万円/m<sup>2</sup>）と、省都・福州市内に匹敵する価格となっているという。



↑ マンションが續々建設されている平潭島新市街地。台湾同様、バイクが目につく。

なお、日本であれば、こうした島全体を改造するような開発には、環境問題や漁業問題等での反対が付きものだと思うが、ここではそうした動きは顕在化していないようだった。島の東部にはまだ昔ながらの農村が残り、風情のある街並みを守っているが、そこで出会った漁民や町の人も「開発があまりに早すぎるので、本当にうまくいくのか心配」としつつ、開発自体には、島の発展にとって千載一遇のチャンスと大いに乗り気な人ばかりだった。

最後に、あとわずか数年で消え去ることになる平潭島の古い町並みの写真を何枚か掲載して記録としておきたい。



漁港の街並み



獲れたての魚が  
売られている